

高等学校国語科戦争教材における理解不能な「他者」の機能

— 林京子『空き缶』の授業実践における生徒の感想の分析から —

教育デザインコース 国語領域

高瀬 桃華

1. はじめに

本研究では、筑摩書房『国語総合』に教材として取り上げられている、林京子『空き缶』に対する生徒の感想の変化に着目することで、「他者」の機能を明らかにすることである。

2. 方法

授業前と授業後のそれぞれに、生徒から感想を集めた。授業前の感想の記入は、1/18 時間目に行い、全 30 人中 23 人から回答を得た(回収率 77%)。授業後の感想の記入は、18/18 時間目に行い、全 30 人中 22 人から回答を得た(回収率 73%)。分析方法は、KJ 法(川喜多、1967 による)である。

3. 結果及び考察

『空き缶』は、5 人の登場人物が 30 年ぶりに母校に集まり、戦争当時を振り返る物語である。5 人の中には 1 人だけ被爆をしていない人物(西田)がいる。その西田が、原爆症等に悩む 4 人に対し「予定が組まれたら進まなきゃならない」と声をかける場面がある。

授業前は、この場面の西田の発言に関係する疑問や批判が 23 人中 7 人(30%)見られた。しかし、授業後には西田に関係する記述が 22 人中 2 人(9%)に減少したという変化が見られた。

このような変化が起こった要因として、生徒たちが被爆により起こった登場人物たちの背景にも目を向けて考えるようになったことが挙げられるだろう。授業前、生徒たちは、登場人物 4 人や原爆の被害を『被爆による苦しみの大きさを知った』というカテゴリーに当てはめている。このことか

ら、生徒たち自身が、登場人物 4 人を「被爆者」と捉えたことにより、「知った」という感覚を持つことができたと考えられる。それが、授業後には『原爆で生き残った人たちの気持ちを理解した』というカテゴリーに変化していた。一方、授業前、非被爆者の西田に対しては、生徒たちと同じ非被爆者であるにもかかわらず、生徒たちは西田の気持ちや発言の意図が理解できずにいた。これは、生徒たちと西田には戦争経験の有無という異なる部分があるにもかかわらず、自分とまったく同じ存在として捉えようとした結果、生徒たちは西田の発言に対して過剰に反応してしまったと推測する。

4. 結論

この『空き缶』という教材において理解不能な「他者」とは、生徒たちが「知った」という感覚を持つ被爆者だけでなく、「知った」という感覚すら持つことができない非被爆者の西田も含まれると考える。理解不能な「他者」である西田が加わったことで、登場人物 5 人が「被爆者 4 人」と「理解不能な『他者』の西田」から、5 人全員が「原爆で生き残った人たち」へと変化したのである。